

10月10日いよいよ開幕！国際美術展「TOKYO ATLAS」 全アーティスト、会期中プログラムを発表！

東京の臨海部を舞台に、アートを媒介とした新たなプラットフォームを創出

東京都、東京国際文化芸術祭実行委員会、公益財団法人東京都歴史文化財団は、2026年10月10日（土）から12月20日（日）まで開催する国際美術展「TOKYO ATLAS」の全アーティスト、関連企画を発表いたします。

本展は、台場、天王洲、青海といった東京の臨海部を舞台に、歴史と先鋭的なアートが会う「台場公園」、大規模なアトリウムを有する「テレコムセンタービル」など多彩な会場に草間彌生やイケムラレイコをはじめとする国内外からアーティストが集い、東京の新たな風景を描き出します。関連企画として、都が支援してきたアーティストやキュレーターによる展覧会「座標」も実施し、国際的な舞台において新進気鋭の才能を多くの方に向けて紹介します。

詳細は別紙をご確認ください。

【名称】 日本語：国際美術展 TOKYO ATLAS（読み方：コクサイビジュツテン トウキョウ アトラス）

英語：TOKYO ATLAS International Art Exhibition

【会期】 2026年10月10日（土）－12月20日（日）

※月曜休（祝日の場合、翌火曜休／10月12日、11月23日開場）

【会場】 ※観覧無料（一部有料プログラムあり）

〔台場エリア〕 台場公園・お台場海浜公園

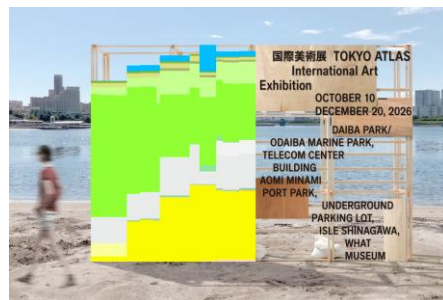
〔青海エリア〕 テレコムセンタービル、青海南ふ頭公園、地下駐車場（青海南ふ頭公園内）

〔天王洲エリア〕 アイルシながわ、WHAT MUSEUM

【主催】 東京都、東京国際文化芸術祭実行委員会、公益財団法人東京都歴史文化財団

【公式ホームページ】

tokyoatlas.jp Instagram：@tokyoatlas_official



本件は、「[2050 東京戦略](#)」を推進する取組です。
戦略15文化・エンタメ「芸術文化で躍動する都市東京を実現」

2050東京戦略



報道関係のお問合せ先

国際美術展「TOKYO ATLAS」広報事務局（株式会社サニーサイドアップ内）

TEL：03-6894-3200

Email：tokyo_atlas_pr@ssu.co.jp

担当：田中（080-4191-6365）、蓮見（080-4652-1423）、堀江、俊成

国際美術展 TOKYO ATLAS International Art Exhibition

プレスリリース
2026年10月8日

目次

1 開催に寄せて	P2
2 アーティスティック・ディレクター	P4
3 会場と参加アーティスト	P5-14
台場エリア：台場公園・お台場海浜公園	P4
天王洲エリア：アイルしながわ	P7
青海エリア：テレコムセンタービル／青海南ふ頭公園／地下駐車場（青海南ふ頭公園内）／ 東京国際クルーズターミナル／東京臨海部広報展示室TOKYOミナトリエ	P8
4 ヴィジュアル・アイデンティティ	P15
5 関連企画	P16
6 連携企画	P17
7 イベントリスト	P18-20
8 開催概要	P21
9 パートナー	P22

1 開催に寄せて

国際美術展「TOKYO ATLAS」は、国際的な文化の潮流が交錯する都市、東京ならではのアートを媒介とした多様な価値観との出会いや交流が生まれるプラットフォームの創出を目指して開催されます。会場となる臨海部は、文字通り、海に向けて開かれた国際都市を象徴する地域であり、本美術展の意図にふさわしい環境を有していると言えるでしょう。

この美術展の特色は、多彩なアートのプロジェクトを美術館などの専用施設に囲い込むのではなく、あえて日常的な市民生活が営まれている都市空間の中に挿入し、街の光景と一体化させることにあります。

タイトルの「ATLAS」とは世界を支える神話的存在であるアトラスに由来し、同時に地図帳を意味しています。私たちは街中に設置された作品を巡り歩くことで、まさに未知の地図をたどるかのように、わくわくした出会いを重ねることになるでしょう。それは東京という街の魅力を新鮮な眼差しで再発見することでもあるはずです。

たとえば、主たる会場の一つ、台場公園は幕末に黒船を迎え撃つ砲台として築かれながらも、結果的には一発の砲弾も放つことなく開国を迎えたというエピソードが伝わる人工島です。近代の幕開けを告げるこの史跡としての公園に配置される作品群は、歴史と先端的なアートが出会う不可思議な景観を出現させるに違いありません。

もう一つの主要なエリアである青海南ふ頭公園エリアは、コンテナふ頭に隣接し、東京国際クルーズターミナルなど東京港の国際的な海運を見渡すことができる場所です。屋外と地下空間に展開されるさまざまな作品やプロジェクトを通して、独自の視点で都市の風景やインフラ、場所性などについて考察する機会となるでしょう。

既存の都市空間へのこうした挑戦は、国際的なアートシーンの第一線に立つアーティストたちの想像力の豊かさや多様な価値観に触れる喜びを観客へもたらすと同時に、東京という都市が秘めている意外な側面、あえて言うならば野生的なバイタリティに目を向けさせてくれることになるかもしれません。

本美術展には東京都が支援してきた若い世代のアーティストたちの作品を紹介する部門も設けられています。都市環境の中で開催されるこの企画が、未来に向けて好奇心を醸成し、新たな「ATLAS」を描いていくことを願います。

東京国際文化芸術祭実行委員会、TOKYO ATLAS アーティスティック・ディレクター 建畠 哲・三木あき子

国際美術展 TOKYO ATLAS International Art Exhibition

OCTOBER 10—DECEMBER 20, 2026

DAIBA PARK/ODAIBA MARINE PARK,
TELECOM CENTER BUILDING,
AOMI MINAMI PORT PARK,
UNDERGROUND
PARKING LOT,
ISLE SHINAGAWA,
WHAT MUSEUM

天王洲エリア Tennoz Area

天王洲ピア
TENNOZ PIER

アイルしながわ ISLE SHINAGAWA

- T08 笹岡由梨子 | Sasaoka Yuriko
- T09 水木 壘 | Mizuki Rui
- T10 盛 圭太 | Mori Keita
- T11 キムスージャ | Kimsooja

WHAT MUSEUM

- R01 関連企画「座標」
Related Exhibition Coordinates

台場公園 DAIBA PARK

- T04 T07 趙 要 (ジャオ・ヤオ) | Zhao Yao
- T05 水木 壘 | Mizuki Rui
- T06 草間彌生 | Kusama Yayoi

台場エリア Daiba Area

台場棧橋
DAIBA PIER

お台場海浜公園 ODAIBA MARINE PARK

- T02 石毛健太 | Ishige Kenta
- T03 イケムラレイコ | Ikemura Leiko

東京臨海部広報展示室 TOKYO ミナトリエ TOKYOminatorie

ATLAS リサーチ&ドキュメント
ATLAS Research & Documents

東京国際クルーズターミナル TOKYO INTERNATIONAL CRUISE TERMINAL

- M13 アブラハム・ボワংশュヴァル | Abraham Poincheval

青海エリア Aomi Area

青海南ふ頭公園 AOMI MINAMI PORT PARK

- M03 ハルーン・ミルザ | Haroon Mirza
- M04 竹岡雄二 | Takeoka Yuji
- M02 ヤギの目 | Goat's Eyes
- M01 アブラハム・ボワংশュヴァル | Abraham Poincheval

テレコムセンタービル TELECOM CENTER BUILDING

- T01 草間彌生 | Kusama Yayoi
- I インフォメーションセンター
Information Center

地下駐車場 (青海南ふ頭公園内) UNDERGROUND PARKING LOT (WITHIN AOMI MINAMI PORT PARK)

- M05—M12

TOKYO ATLASの会期中、お台場、天王洲などの会場を結ぶ船が運航します。東京を代表する水辺エリアの景色とともに、アート巡りをお楽しみください。
During TOKYO ATLAS, boats will operate between the exhibition venues in Odaiba, Tennoz, and other waterfront areas.
Enjoy exploring the art while taking in the scenic views of some of Tokyo's most iconic waterfront destinations.

ARTE TOKYO CRUISE

*客船入港時は、原則として作品はご覧いただけません。東京都港湾局ウェブサイトの入港予定をご確認ください。
*As a general rule, the artworks cannot be viewed when a cruise ship is in port.
Please check the cruise ship schedule on the Tokyo Port and Harbor Bureau website before visiting.

<https://tokyoatlas.jp>

2 アーティスティック・ディレクター



Photo by Kitajima Akira

建畠 哲 | Tatehata Akira (写真左)

美術評論家、詩人／草間彌生美術館長、京都芸術センター館長、川口市立美術館長
京都市立芸術大学および多摩美術大学名誉教授

国立国際美術館主任研究官、多摩美術大学教授、国立国際美術館長、京都市立芸術大学学長、多摩美術大学学長、コロンビア大学訪問研究員などを歴任。美術館と大学で現代美術の展覧会企画や教育研究に携わるとともに、ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館コミッショナー（1990、1993）、横浜トリエンナーレ（2001）、あいちトリエンナーレ（2010）、東アジア文化都市京都「アジア回廊」展（2017）など国際美術展の芸術監督を務めてきた。受賞歴はオーストラリア国家栄誉賞、文化庁創立50周年記念表彰、京都市文化功労者。詩人としては、歷程新鋭賞、高見順賞、萩原朔太郎賞を受賞している。

三木あき子 | Miki Akiko (写真右)

キュレーター／直島新美術館長、ベネッセアートサイト直島インターナショナル・
アーティスティック・ディレクター

パレ・ド・トーキョー（パリ、フランス）の創設メンバーとして2000年から2014年までチーフ&シニア・キュレーターを務めるとともに、台北ビエンナーレ（1998）、ヨコハマトリエンナーレ2011アーティスティック・ディレクター、同2017コ・ディレクター、バンコク・アート・ビエンナーレ（2024）など国際現代美術展の芸術監督やキュレーターを歴任。また、パービカン・アート・ギャラリー（ロンドン）、台北市立美術館、韓国国立現代美術館、森美術館、横浜美術館、京都市京セラ美術館、弘前れんが倉庫美術館にて、数々の展覧会のゲスト・キュレーターも担う。『Insular Insight』（Lars Müller、2011、ドイツ建築博物館建築本賞）など共著・共編も多い。

3 会場と参加アーティスト

建畠 哲 アーティスティック・ディレクター 展示

担当エリア

〔台場エリア〕 台場公園・お台場海浜公園

〔天王洲エリア〕 アイルしながわ

〔青海エリア〕 テレコムセンタービル

企画体制

黄 夢圓 (アシスタント・キュレーター)

西山裕子 (プロジェクト・コーディネーター)

水田紗弥子 (コーディネーター)

台場エリア | 台場公園・お台場海浜公園

会場

幕末期に黒船を迎え撃つ砲台として築かれた台場は、一発の砲弾も放つことなく開国を迎えた歴史を持つ人工の島です。その跡地が公園となった本会場は、草地や灌木の中に史跡が点在するという野趣に溢れた空間で、自然と歴史とが共存する独特の雰囲気が醸し出されています。一方、接続するお台場海浜公園は人工の砂浜で、台場公園とは対照的に海へ向けて広がる大らかな景観のダイナミズムを有しています。

これらの地区では、草間彌生による《ナルシスの庭》(1966／2026) や趙要 (ジャオ・ヤオ) による《Something in the Air》(2019)、石毛健太による音響インスタレーション作品などの環境を生かした作品が配置されます。さらには、イケムラレイコによる高さ6mの巨大彫刻作品もお台場海浜公園沖の水上に設置されます。鑑賞者は散策し、立ち止まり、振り返ることで、美術館などとは異なった作品と場との関係そのものを体験することになるでしょう。それは東京という都市の魅力の再発見の機会ともなるに違いありません。



台場公園

1928年7月7日開園、面積29,963.40㎡。ペリー来航を機に、外国の脅威から江戸を守るために幕府が砲台として築造した。現存する二つの台場のうち「第三台場」が都立公園となり、陣屋や火薬庫の跡など、貴重な江戸時代からの史跡が残る。



お台場海浜公園

1975年12月1日開園。面積510,809.79㎡ (うち水域435,395.00㎡)。対岸に高層ビル群を臨み、海を公園の一部とする都市型海浜空間。全長約800mの人工砂浜「おだいばビーチ」からはレインボーブリッジや夕景・夜景を一望できる。

参加アーティスト

イケムラレイコ | Ikemura Leiko

三重県津市生まれ。ベルリン、ケルン拠点。1970年代にスペインへ渡り、セビリア美術大学で学んだ後、スイスを経てドイツを拠点に活動。絵画、彫刻、ドローイング、写真、ガラス作品など多様なメディアを横断しながら、生命の生成や変容、人間と自然、生と死の境界といった根源的なテーマを探究している。少女や動物、風景を想起させる有機的なモチーフを通じて、東洋の感性とヨーロッパ絵画の伝統が交差する詩的かつ幻想的な世界観を展開し、国際的に高い評価を得ている。1991年から2015年までベルリン芸術大学教授を務めた。2025年文化功労者。

近年の主な個展に、「Motherscape」(アルベルティーナ美術館、ウィーン、オーストリア、2025)、「The Sea in the Mountains」(ビュンドナー美術館、クール、スイス、2025)、「Light on the Horizon」(Heredium、デジョン広域市、韓国、2024)、「Toward New Seas」(バーゼル美術館、スイス、2019)、「土と星 Our Planet」(国立新美術館、東京、2019) がある。



《ムーンラビット・ランディング》コンセプト・ドローイング2026



©Leiko Ikemura

Photo by María Rúnarsdóttir

台場エリア | 台場公園・お台場海浜公園

参加アーティスト

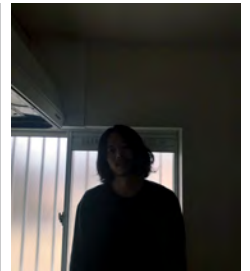
石毛健太 | Ishige Kenta

1994年神奈川県生まれ、東京拠点。多摩美術大学情報デザイン学科メディア芸術コース卒業後、東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。美術家、エキシビションメーカーとして、絵画、インスタレーション、プロジェクト型の作品など多様な表現を横断しながら、都市や日常の風景、知覚と物語の関係を探る制作を行っている。現場と関係を結ぶ実践的なプロジェクトや、作品と鑑賞者の偶発的な出会いを組み込む構造的アプローチが特徴である。

近年の主な展覧会に、個展「Fever dream」(FOC、石川、2026)、「日本現代美術私観：高橋龍太郎コレクション」(東京都現代美術館、東京、2024)、「ジャンクス・ボーツ」(ANOMALY、東京、2023)



《ただの水ではない》2019
「生きられた庭」(京都市立植物園、京都、2019での展示風景)



水木 壘 | Mizuki Rui

1983年京都府生まれ、同地拠点。京都市立芸術大学大学院美術研究科メディア・アート領域博士後期課程修了。郊外、多様性、自然、ストリートカルチャー、移動などをキーワードに、都市文化と美術史上の問題を接続しながら、現代都市における風景・情景・身体・モノの絡まり合いを主題とした作品を制作している。

近年の主な展覧会に、「包摂とL」(京都芸術センター、京都、2025)、「EAST EAST」(Manggha Museum of Japanese Art and Technology、クラクフ、ポーランド、2025)、個展「風に、傾く陽と。」(CAVE-AYUMI GALLERY、東京、2025)、「見るは触れる日本の新進作家 vol.19」(東京都写真美術館、東京、2022)、個展「東下り」(WAITINGROOM、東京、2019)、個展「鏡と穴ー彫刻と写真の界面 vol.3 水木壘」(gallery aM、東京、2017) などがある。

※水木は「アイルしながわ」にも作品を展示いたします。



《P⁴ (Pioneer Plants Printing Projects)》2025



趙要(ジャオ・ヤオ) | Zhao Yao

1981年四川省生まれ、北京拠点。絵画、インスタレーション、写真、映像、パフォーマンスといった多様な表現を横断しながら、認識論や知覚、日常性、制度的な枠組みなどに鋭く切り込む独自の視点で制作している。日常の経験と芸術的経験との架け橋を築き、知覚と意味の生成を問う作品は、観る者に慣れ親しんだものを再考させる知覚的・概念的な体験をもたらす。

近年の主な展覧会に、「If the World We」(第59回カーネギー・インターナショナル、カーネギー美術館、ピッツバーグ、アメリカ、2026)、個展「By and by it unfolds and then folds」(Fosun Foundation、上海、中国、2025)、「タイランド・ビエンナーレ」(ブーケット、タイ、2025)、個展「まあ普通、でも…」(オオタファインアーツ東京/7CHOME、東京、2025)、個展「Signals from Heaven, Signals from Heaven」(北京公社、北京、中国、2018)、個展「A Painting of Thought」(Pace Gallery、香港、2015) などがある。



《Something in the Air》2019
© Zhao Yao, Courtesy of Ota Fine Arts



天王洲エリア | アイルしながわ

会場

かつて都市のごみ集積場として使われていた本施設は、再開発によって周辺の水辺沿いの広場や遊歩道が整備され、歴史の記憶を内包した都市空間として生まれ変わっています。人工的な構造物と開かれた水面、かつての用途の名残が混ざり合うこの場所では、笹岡由梨子による映像インスタレーション、盛 圭太によるインスタレーション作品などが展示される予定です。



アイルしながわ
2022年10月開設、面積約900㎡・天井高約10m。旧東品川清掃作業所を再活用した交流拠点。天王洲アイルの運河沿いに位置し、アート活動やバラスポーツなどの施設利用を通じて地域の賑わいを生み出している。

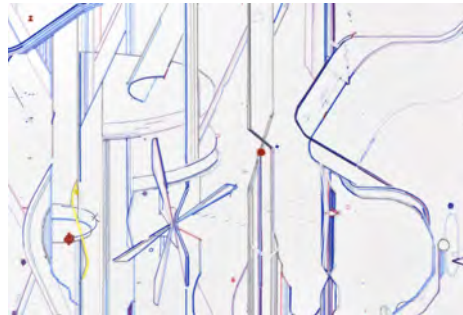
参加アーティスト

盛 圭太 | Mori Keita

1981年北海道生まれ。パリ拠点。2004年に多摩美術大学彫刻学科卒業後、文化庁新進芸術家海外研修員として渡仏。パリ国立高等美術学校に在籍した後、パリ第VIII大学大学院美術研究科先端芸術修了。糸を紙や壁面にグルーガンで貼り付ける独自の手法によるドローイング作品で知られ、線の起源を「糸」とする仮説を基に、建築、織物、都市構造、システムに内在する「バグ（エラー）」を主題とした制作を展開している。緻密な構造と偶発性が共存する作品は、ドローイングの空間的・彫刻的拡張として国際的に高い評価を得ている。

近年の主な展覧会に、個展「／」（多摩美術大学彫刻棟ギャラリー、東京、2026）、個展「眠たい名前」（アニエスパー ギャラリー プティック、東京、2023）、「ドローイングの可能性」（東京都現代美術館、東京、2020）、「Walk The Line – New Paths in Drawing」（ヴォルフスブルク現代美術館、ヴォルフスブルク、ドイツ、2015）などがある。

協賛：横田株式会社



〈Bug report〉（部分）2024
© ADAGP Keita Mori. Photo by Rebecca Fanuel
Courtesy the artist and Galerie Putman, Paris

笹岡由梨子 | Sasaoka Yuriko

1988年大阪府生まれ。関西拠点。自らが主演する操り人形芝居仕立ての大規模な映像インスタレーション作品で知られるが、その手作り感のあるユーモラスなイメージとストーリーは、愛や家族といったアンチームなテーマなどに想を得つつも、時にいささか辛辣であり不穏でもある文化的な省察や批評性を宿している。また、中東欧に長期間滞在し、自ら作詞作曲した壮大な民族叙事詩ともいべき作品を制作するという発想のスケールの大きさも注目される。

近年の主な展覧会に、個展「笹岡由梨子のパラダイス・ダンジョン」（滋賀県立美術館、滋賀、2026）、個展「ポロニア × キュリー・マジック・ラボ 移動のカー」（大阪市中央公会堂、大阪、2025）、個展「Yuriko Sasaoka: Animale」（PHD Group、香港、2025）、個展「Zniknij Z Ziemi」（Trafostacja、シュチェチン、ポーランド、2021）などがある。



Photo by S.C.Felix Wong

〈タイムズ〉2026. Photo by 麥生田兵吾

キムスージャ | Kimsooja

1957年大邱生まれ、ソウル拠点。絵画、縫製、インスタレーション、パフォーマンス、映像、光、音など多様な表現を通して、媒体や形式の区別を超え、生命と芸術の全体性を探究。非物質的なものを追求し続ける彼女の揺るぎない姿勢と、「何もしないこと、何かをつくらないこと（non-doing, non-making）」を美学的な枠組みとして取り入れる姿勢は、さまざまな媒体や方法論への長年にわたる取り組みの根底にある。それは、概念的かつ瞑想的な美学とヒューマニズムを通じて、芸術と人間のあり方を問い続ける彼女の実践を支えている。

主な展示に、「Dimensions of a Needle」（トロント現代美術館 [MOCA Toronto]、トロント、カナダ、2026年）、「To Breathe – Mokum」（Oude Kerk、アムステルダム、オランダ、2025年）、「To Breathe」（He Art Museum [HEM]、佛山／広州、中国、2025年）、「To Breathe – Constellation」（ブルス・ドウ・コメルスービノー・コレクション、パリ、フランス、2024年）などがある。



Portrait at EMST
by Giannis Vastardis

〈針の女 東京〉1999

青海エリア | テレコムセンタービル

会場

青海エリアを象徴し、大規模なスケールを有する本ビルの中心にあるアトリウムに、草間彌生による2つのバルーン作品、《ヤヨイちゃん》(2012／2023) と、日本初公開となる《宇宙へ行って見た愛の花束》(2021) を展示します。この2作品を組み合わせる展示の試みは、世界初です。《ヤヨイちゃん》が作家自身の分身として「内なる宇宙」を象徴する存在であるのに対し、《宇宙へ行って見た愛の花束》は、生命と愛が無限に広がっていく「外なる宇宙」のイメージを表現しています。両作が出会うことで、内と外、個と宇宙が対話する場が立ち上がります。

柔らかなバルーン素材は硬質な建築空間と呼応し、アトリウム全体を包み込む祝祭的な空間を生み出します。来場者は上下階を移動しながら多様な視点で作品を体験でき、昼夜によって異なる表情を見せる空間は、幻想的な“草間彌生の宇宙”として強い印象を残すでしょう。

参加アーティスト

草間彌生 | Kusama Yayoi

1929年長野県松本市生まれ、東京拠点。幼少期から幻視・幻聴を体験し、網目模様や水玉をモチーフにした絵画を制作し始める。1957年に渡米、ネット・ペインティング、ソフト・スカルプチュア、鏡や電飾を使ったインスタレーションやハプニングなど多様な活動を展開し、ニューヨークのアートシーンを牽引するアーティストとして注目を浴びた。70年代半ばに帰国。単一モチーフの強迫的な反復と増殖による自己消滅という独自の世界は、90年代に入って改めて高く評価されるようになり、近年は巨大なバルーンを浮遊させたインスタレーションでも知られる。

これまで1998年にニューヨーク近代美術館など国内外の主要美術館で回顧展が開催されるほか、現在も大規模個展「Yayoi Kusama」がヨーロッパ3カ国を巡回中。東京には2017年に草間彌生美術館が設立され、作家自身の構想に基づき、その表現と思想を継続的に発信している。

※草間は「台場公園」にも作品を展示いたします。



テレコムセンタービル
1996年2月開業、面積158,050.18㎡。全面ガラスウォールが印象的な臨海副都心のランドマーク的存在であり、高い安全性と快適な職場環境を提供するビル。高さ37m、5層吹き抜けの大規模なアトリウムを有する。*写真はアトリウム



《宇宙へ行って見た愛の花束》2021、「Yayoi Kusama: A Retrospective」(グロピウス・バウ、ベルリン、ドイツ、2021)での展示風景
© YAYOI KUSAMA, Courtesy of Ota Fine Arts

3 会場と参加アーティスト

三木あき子 アーティスティック・ディレクター 展示

担当エリア

〔青海エリア〕 青海南ふ頭公園、地下駐車場（青海南ふ頭公園内）、東京国際クルーズターミナル、東京臨海部広報展示室TOKYOミナトリエ

企画体制

兼平彦太郎（キュレーター）
坂口千秋（プロジェクト・コーディネーター）
大曽根朝美（コーディネーター）

コラボレーター

フジワラテッペイアーキテクツラボ
HIGURE 17-15 cas
滝口悠生
ふえみにゃん

青海エリア | 青海南ふ頭公園

会場

保税エリアを擁し、大型貨物コンテナやガントリークレーンが並ぶ青海コンテナ埠頭に隣接する青海南ふ頭公園は、東京国際クルーズターミナルや対岸の大井コンテナ埠頭など、東京港の国際的な海運を見渡すことのできる公園です。ここでは、作家自ら巨大なボトルのなかで生活し、プライバシーや公共空間の在り方を検証するアブラハム・ポワンシュヴァルのパフォーマンス作品《La Bouteille》（2015ー）や、東京藝術大学小沢剛研究室らによるヤギの飼育を通して、持続可能な創作や研究、表現の場を探索する《ヤギの目》（2020ー）といったプロジェクトを予定しています。東京という国際都市の水辺で、アーティストや参加者たち相互の対話や、人間のみならず動物や植物との共存から、オルタナティブな社会実践やこれからのコミュニティの在り方を思索するキャンプサイト、あるいはグレイッジのような場をイメージしています。



青海南ふ頭公園
1997年4月1日開園、面積43,760.40㎡。臨海副都心地区の南端に位置し、青海コンテナ埠頭に隣接するL字の形をした公園である。船や飛行機、大きなコンテナ埠頭の風景とともに開放的な景色が広がる。

参加アーティスト

アブラハム・ポワンシュヴァル | Abraham Poincheval

1972年アランソン（フランス）生まれ、マルセイユ拠点。ポワンシュヴァルは飽くなき探検家である。彼の探検は自身の身体との関わりによって遂行され、このとき作り出される居住可能な彫刻は、時間の経過や不動の状況などについて考察する実験室であり、アーティストを受け入れる容器でもある。そしてそれは風景を異化し鑑賞者が目撃する物語を実在化するオブジェとして機能する。

近年の主な展覧会やパフォーマンスに、パリオリンピックに合わせてサン＝ドニ運河に巨大なボトルを浮かべ、そこで10日間生活した《La Bouteille》（パリ、フランス、2024）をはじめ、「La Collection, Rendez-vous avec le sport」（Fondation Louis Vuitton、パリ、フランス、2024）、「バンコク・アート・ビエンナーレ 2024」（バンコク、タイ、2024）などがある。

助成：在日フランス大使館／アンスティチュ・フランス

協賛：アニエスベー

※ポワンシュヴァルは「東京国際クルーズターミナル」にも作品を展示いたします。



《La Bouteille》2024、パリでのパフォーマンス風景

Photo by Hafid Lhachmi / ADAGP Paris 2024. Courtesy Semiose



Photo by Jean-Christophe Lett

ヤギの目 | Goat's Eyes

2020年発足。東京藝術大学先端芸術表現科の小沢剛研究室を中心とした学生、教員、地域住民有志、取手アートプロジェクトがヤギの飼育をプラットフォームとしてつながり、壁も屋根もないアーツセンターとして活動。多様なメンバーがヤギと共に行う日々の営みを通じて、現代社会における持続可能な表現、次世代のコミュニティのあり方も模索している。

主な展覧会に第一回および第二回「ヤギの目ビエンナーレ」（共に、たいけん美じゅつ場VIVA、茨城、2021および2023）がある。また、これまでの活動記録をまとめた書籍『ヤギの目記録採取帳2020ー2023』（2023）と『ヤギの目記録採取帳 2023ー2025』（2026）を発行している。

助成：JST共創の場形成支援プログラム「共生社会をつくるアートコミュニケーション共創拠点」（JPMJPF2105）

協賛：株式会社モノクローム



《ヤギの目》



《ヤギの目》概念図

青海エリア | 青海南ふ頭公園

参加アーティスト

ハルーン・ミルザ | Haroon Mirza

1977年ロンドン生まれ、同地在住。音や光、電気のあいだに生じる現象や干渉を積極的に取り入れ、その仕組みやプロセスをあえて見せることで規定のルールを問いなおす彫刻、インスタレーション、パフォーマンスなどを発表している。その関心は、社会政治的なトピックにも言及するアシッド・ハウスからサイマティクスやシャーマニズムまで他領域を横断している。

主な展示に「Everything Was, Is and Always Will Be」(Fire Station, ドーハ、カタール、2026)、「Waves and Forms」(アバディーン美術館、アバディーン、スコットランド、2020)、「The Construction of an Act」(オーストラリア現代美術センター (ACCA)、メルボルン、オーストラリア、2019) などがある。「第54回ヴェネチア・ビエンナーレ」(ヴェニス、イタリア、2011) では銀獅子賞を受賞した。

助成：ブリティッシュ・カウンシル

協賛：株式会社モノクローム



《Adam, Eve, Others and a UFO》2013
Installation view at Marres House for Contemporary Culture, 2014
Photo by Gert Jan van Rooij



Courtesy the artist

竹岡雄二 | Takeoka Yuji

1946年京都府生まれ、デュッセルドルフ拠点。現代美術の展示方法に関する形式に強い関心を持ち続け、「ものを作る」ことから「ものを見せる」ことを作品のテーマに制作を行っている。台座そのものを彫刻とし、余分な要素を削ぎ落として作品を見せる「空間呈示」をすることで新たな知覚や意味を生み出す作品を手がけている。

主な展覧会に「台座から空間へ」(国立国際美術館、大阪、2016 / 埼玉県立近代美術館、遠山記念館、共に埼玉、2016)、「Zum Nullpunkt der Bildhauerei, Sculptur at Square Zero」(ゲルハルト・マルクスハウス、ブレーメン、ドイツ、2012)、「Yuji Takeoka: Museo」(ヨゼフ・アルパース美術館、ボトロップ、ドイツ、2011)、「Documenta 9」(カッセル、ドイツ、1992) などがある。

協賛：東急株式会社



「TOKYO ATLAS 2026 公共彫刻のためのプラン」2026



Photo by Tamon Takeoka

青海エリア | 地下駐車場(青海南ふ頭公園内)

会場

青海南ふ頭公園には、全長197.5mの地下空間が広がっています。今回の企画に際し、現在は利用を休止しているこの場所が特別に展示会場の一つとして開放されます。地上の展示と対をなすような、また、通常は足を踏み入れることの出来ないこの地下空間の特性を活かした展示を予定しています。

※本会場は時間指定予約制となります。

<https://artsticker.app/events/157445>



地下駐車場(青海南ふ頭公園内)
1997年4月利用開始、面積7,603.75㎡、216台収容可能な駐車施設。

参加アーティスト

ムン・キョンウォン&チョン・ジュン | Moon Kyungwon & Jeon Joon

ムン・キョンウォン：1969年ソウル（韓国）生まれ。チョン・ジュン：1969年釜山（韓国）生まれ。共にソウル在住。ムンは主に絵画と実験映画、チョンは彫刻とインスタレーションで、それぞれソロ・アーティストとして活動も行ない、2009年よりデュオとしての活動を開始。様々な領域の専門家との対話や協働により「現代世界における芸術の社会的機能と役割は何か」を問い直すプロジェクト「News from Nowhere」を主軸に活動を展開している。近年の主な展覧会に「Every Island is a Mountain」(Palazzo Malta、ヴェネチア、イタリア、2025)、「Weather Station」(アートソングセンター、ソウル、韓国、2022)、「どこにもない場所のこと」(金沢21世紀美術館、金沢、2022)、「Minds Rising Spirits Tuning」(光州ビエンナーレ、光州、韓国、2021)などがある。



《News from Nowhere: Eclipse》
Installation view at Basel Unlimited, Basel, 2022
Courtesy of the artists

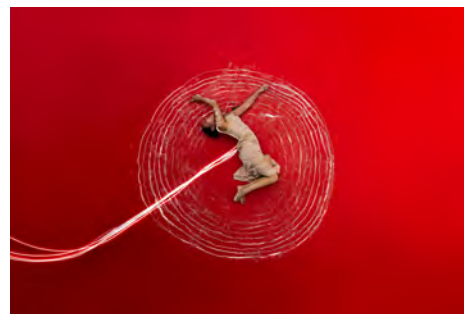


カウィター・ワッタナチャンクーン | Kawita Vatanajyankur

1987年バンコク生まれ、同地拠点。女性の家事労働や工業用機械の動きを自身の身体を用いて表現した映像や写真のインスタレーション作品で知られる。大量消費社会における人間の疎外感を中心テーマに、近年はAIを用いて記憶と身体に関する探究も行っている。

2026年、上海の余徳耀美術館（Yuz Museum）で個展「Memory Machine」（上海、中国、2026）を開催。

主なグループ展に、シンガポール美術館での「Everyday Practices」（シンガポール、2024）、ヴェネチア・ビエンナーレでの「The Spirits of Maritime Crossing」（ヴェネチア、イタリア、2024）、バンコク・アート・ビエンナーレ（バンコク、タイ、2022）などがある。TOKYO ATLASでは、青海の地下駐車場で制作した新作映像作品を発表する。



《The Machine Ghost in the Human Shell》2024
In Collaboration with Pat Pataranutaporn

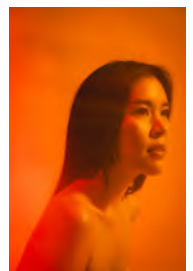


Photo by Anantaporn Intravisit

イベエ・ヌル | Ipeh Nur

1993年ジョグジャカルタ生まれ、同地拠点。ヌルの作品は、個人的な経験、日常生活における問題、記憶、レジリエンス、そして背景となる歴史的出来事を基盤としている。演劇的なヴィジュアルから着想を得て、主にドローイングを中心に制作しているが、パティック（ろうけつ染め）、陶芸、版画、彫刻、インスタレーション、映像、壁画など、多様なメディアや技法も用いている。近年は海にまつわる文化、知識の継承、古代神話に言及する作品を発表している。

近年の主な展覧会に「Setelah Padam」(Kedai Kebun Forum、ジョグジャカルタ、インドネシア、2025)、「Sharjah Biennial 16」(シャールジャ酋長国、アラブ首長国連邦、2025)、「Constellations」(47 Canal、ニューヨーク、アメリカ、2025)、「Small World Cinema」(SculptureCenter、ニューヨーク、アメリカ、2024)、個展「Menghanyut: Tubuh dan Perjalanan」(Soboman 219 Art Space、ジョグジャカルタ、インドネシア、2022)などがある。



《Ombak Belun Tidur》2024
Photo by Ela Bialkowska, OKNO Studio for PinchukArtCentre/Future Generation Art Prize 2024

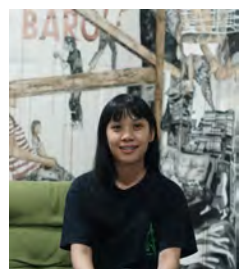


Photo by the artist and ara contemporary

青海エリア | 地下駐車場(青海南ふ頭公園内)

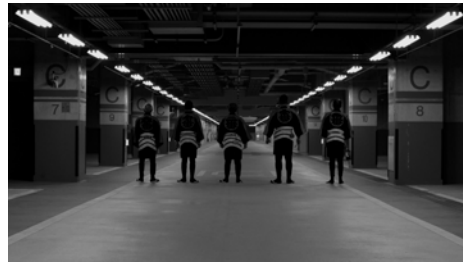
参加アーティスト

潘逸舟 | Han Ishu

1987年上海生まれ、東京拠点。幼い頃に上海から青森に移住した自身の経験や視点をもとに、社会と個人の関係のなかで生じる疑問や戸惑いを省察し、自らの身体に反照することで、見るものにそこに内在するイデオロギーや様々な規範のあり方を問いかけている。映像、パフォーマンス、インスタレーション、写真、絵画など多様なメディアにより、真摯ななかにもユーモアあふれる作品を展開している。

近年の主な展覧会に、個展「アートは美しくなければならない」(青森県立美術館、青森、2025)、「MOTアニュアル2021ー海、リビングルーム、頭蓋骨」(東京都現代美術館、東京、2021)、「ホーム・スイート・ホーム」(国立国際美術館、大阪、2023 / 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館、香川、2024)、「The 11th Asia Pacific Triennial of Contemporary Art」(Queensland Art Gallery | Gallery of Modern Art、ブリスベン、オーストラリア、2024) などがある。

協力：一般社団法人江戸消防記念会



《波になる》2026
Courtesy of the artist and ANOMALY



Photo by Sakiko Nomura

ムハンナド・ショノ | Muhannad SHONO

1977年リヤド生まれ、同地拠点。自身のルーツやアイデンティティへの問いを出発点に、歴史やイデオロギー、物語の単一的な構造を批評的に考察したインスタレーションやドローイング、彫刻など、多岐にわたる作品を発表している。自然と人間の両義的な関係に目を向け、砂漠の砂や風を用いたインスタレーション、ビルのドレン水で生き延びる植物など、自然と人間の複雑な関係を冷静に見つめた詩的で物語性を感じさせる作品が多い。2022年「第59回ヴェネツィア・ビエンナーレ」にてサウジアラビア代表を務めた。

近年の主な展覧会に、「What Remains, Desert X」(コーチェラ・ヴァレー、カリフォルニア、アメリカ、2025)、「海の芸術祭」(釜山、韓国、2023)、「イスラム・アーツ・ビエンナーレ」(ジェッダ、サウジアラビア、2023) などがある。



《The Teaching Tree》2022
59th Venice Biennale, the National Pavilion of Saudi Arabia, 2022

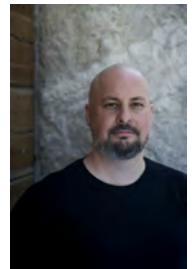


Photo by Artur Weber

ケイティ・バタースン | Katie Paterson

1981年グラスゴー生まれ、スコットランド拠点。地球の歴史、地質学的な時間、自然とのつながり、月や星、宇宙との距離など、存在の起源と人類の関係性に端を発した壮大で抽象的な概念に詩的にアプローチし、フィジカルな体験へと変える作品を発表している。世界各地で発表される作品には、研究機関や研究者、小説家など、さまざまな分野の専門家との協働プロジェクトも多数ある。

近年の主な展覧会やプロジェクトに、「FROM AMBER TO THE STARS」(Mikalojus Konstantinas Ciurlionis National Art Museum、カウナス、リトアニア、2025)、個展「there lay the Days between」(MIT List Visual Arts Center、マサチューセッツ、アメリカ、2024)、ソロプロジェクト「Future Library」(100 Year Commission、オスロ、ノルウェー、2014-2114) などがある。

助成：大和日英基金

協賛：ヤマハ株式会社



《Earth-Moon-Earth (Moonlight Sonata Reflected from the Surface of the Moon)》2007
Photo © Ben Blackall, 2016. Courtesy of the Lowry



Photo by © James Bennet

篠田太郎 | Shinoda Taro

1964年東京生まれ。2022年没。造園を学んだ後に作家活動を開始する。一貫して人間と自然の関わりを深く問う作品は、ドローイング、彫刻、ビデオ、インスタレーションと多岐にわたり、国際的に高い評価を得ている。パブリックコレクションとして、森美術館、ルイヴィトン財団、日産自動車株式会社などに収蔵。さいたま国際芸術祭(2020年) Martin-Gropius-Bau(ベルリン、2019年)、シャルジャビエンナーレ(2017年)、シドニービエンナーレ(2016年) 森美術館(東京、2010年)、広島市現代美術館(広島、2002年) など国内外の展覧会にも多数参加。



《Space Camp Site》2005



Courtesy of
MISA SHIN GALLERY

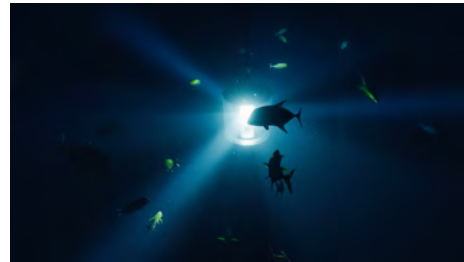
青海エリア | 地下駐車場(青海南ふ頭公園内)

参加アーティスト

ジュリアン・シャリエール | Julian Charrière

1987年モルジュ生まれ。ベルリン拠点。シャリエールは、パフォーマンス、彫刻、映像、写真などを横断しながら、資源採掘の現場から火山のカルデラ、遠隔地の氷原、核実験場に至るまで、境界的な場所でのフィールドワークを起点に作品を制作。地質学的・文化的なアイデンティティが強く刻まれた場所に身を置くことで、彼はそこに別の歴史の可能性を想像し、「自然」に対する私たちの認識がいかに変化してきたのかを考察する。

主な展覧会に「バンコクアートビエンナーレ2026」(バンコク、タイ、2026)、「Midnight Zone」(ヴォルフスブルク美術館、ヴォルフスブルク、ドイツ、2026)、「Kairos Resounding」(ローレン・グラッソとの2人展)(798CUBE、北京、中国、2026)などがある。



《Midnight Zone》2024

Installation view: Museum Tinguely, Basel, 2025. Photo by Jens Ziehe



© The Artist

Photo by Art/beats, 2026

青海エリア | 東京国際クルーズターミナル

会場

東京の海の玄関口である東京国際クルーズターミナルは、世界最大級の客船に対応可能な施設として、大型船をはじめ多様な客船の受け入れを行っています。CIQをはじめとする受け入れ機能を備える一方、客船の入港がない日はイベント会場としても活用されています。ここでは、アブラハム・ボワンシュヴァルの映像作品を上映。さまざまな国から人が立ち寄り、またどこかへ旅立つターミナルという、どこか浮遊感のある場所との対話をもたらしめます。

※客船入港時は、原則として作品はご覧いただけません。
東京都港湾局ウェブサイトの入港予定をご確認ください。



東京国際クルーズターミナル
2020年にオープン。4階建、延床19,000㎡。
世界最大級のクルーズ客船にも対応可能なクルーズターミナル。

青海エリア | 東京臨海部広報展示室TOKYOミナトリエ

会場

ATLAS リサーチ&ドキュメンツ

江戸時代から現在、そして未来までの東京港と臨海副都心のあゆみを紹介する東京臨海部広報展示室TOKYOミナトリエ。大きな窓からは地上100mの位置から東京臨海部が見渡せ、TOKYO ATLASの会場の一つでもある青海南ふ頭公園も一望できます。ここでは、「ATLASリサーチ&ドキュメンツ」として、土地のリサーチに基づき本展のヴィジュアル・アイデンティティを構築した田中義久+centre Inc.の制作プロセスや、アーティストたちのリサーチ過程を一部ご紹介します。



東京臨海部広報展示室
TOKYOミナトリエ
「港」「ヒストリエ(歴史)」「アトリエ」を
合わせた名称で、江戸時代から現在、
そして未来までの東京港と臨海副都
心のあゆみを紹介する。

4 ヴィジュアル・アイデンティティ



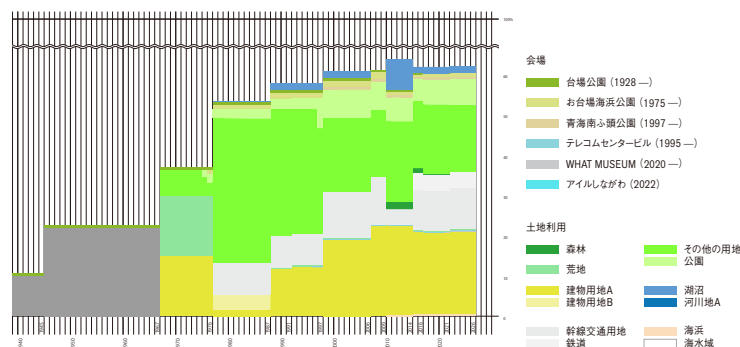
タイトルに含まれる「ATLAS」は地図帳の意味を含み、場所ごとの特性や成り立ちを読み解いていく視点を示しています。初回の開催地である臨海エリアは、江戸時代に防衛施設として築かれた台場をはじめ、時代ごとに異なる役割や機能のもとで段階的に形成されてきた埋め立て地であり、港湾・物流機能を担ってきた青海、倉庫群を基盤に文化活動が集積してきた天王洲と、各エリアがそれぞれ異なる性格を有しています。

こうした背景を踏まえ、ヴィジュアル・アイデンティティ (VI) は、東京で始まる国際美術展としての認知を担うと同時に、開催エリアを読み解くための視点として機能することが重要だと考えました。土地に刻まれてきた変化や人の営みをリサーチし、VIとしての視認性を担保しながら、場所性を象徴的に可視化しています。「TOKYO ATLAS」のVIは、単一のロゴや固定的なグラフィックによって示されるものではなく、場所性や文脈に応じて立ち上がる視覚的な装置です。都市の成り立ちや現在を感じ取るための手がかりとなり、展示体験を支える基盤となることを目指しています。

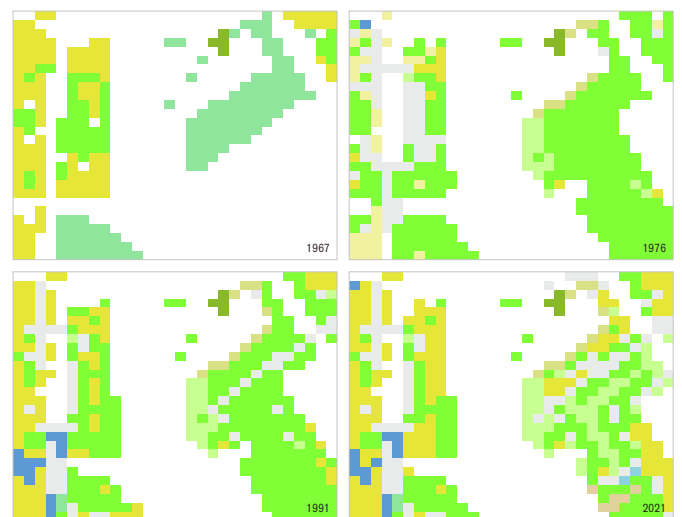
土地の変遷をグラフとしてヴィジュアル化

臨海エリアの年代別土地利用データをもとに、用途別面積の変化を算出し、グラフとしてヴィジュアル化しました。埋め立てによる土地の拡張と、そこに生まれてきた人の営みの変遷を、この土地固有の視覚的アイデンティティとして捉えています。

さらに、台場・青海・天王洲の各開催エリアごとに面積を再集計し、それぞれに対応するグラフを作成しています。各エリアの性質を反映したヴィジュアルとして、開催場所ごとに展開していく予定です。



右図の各土地利用面積を集計グラフ化



台場・青海・天王洲エリアの周辺の埋め立てと土地利用の変遷 (抜粋)

田中義久+centre Inc.

1980年生まれ。武蔵野美術大学空間演出デザイン学科卒業、慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科修士課程修了。主宰するcentre Inc.では、行政・教育・企業機関などと協働し、紙媒体における視覚言語の拡張を起点に、今日のデザイン領域をリサーチし、その成果を社会実装している。主な仕事に、東京都写真美術館、第58回ヴェネチア・ビエンナーレ国際美術展 日本館、国際芸術祭あいち2022、TOKYO ART BOOK FAIRのVI計画、Takeo Paper Show 2018、ISSEY MIYAKEのアートディレクションなど。また、アーティストデュオ「Nerhol」としても活動している。令和6年度(第75回)芸術選奨文部科学大臣新人賞受賞。

上図 | 国土数値情報(土地利用細分類メッシュデータ)(国土交通省)および、国土調査(土地分類調査・水調査)(国土交通省)を加工してcentre Inc.が作成 出典: <https://nlftp.mlit.go.jp/ksj/gml/datalist/KsjTmplt-L03-b.html> https://nlftp.mlit.go.jp/kokjo/inspect/landclassification/land/land_history_2011/index_tile.html

5 関連企画

新進気鋭のアーティストやキュレーターを国内外に広く紹介する企画展「座標」のほか、子供向けのワークショップや、〈アート×ビジネス〉をテーマとした企業情報展等のプログラムも実施予定です。各種プログラムについては、随時公表いたします。

座標 | Coordinates 東京都による支援作家たちの現在地

企画展「座標」は、東京都がこれまで支援してきたアーティストやキュレーターを紹介し、その活躍を後押しすることを目的に開催します。TOKYO ATLASという国際的な舞台において、それぞれの活動の軌跡や現在地、多様な視点や実践が集積し、交差することで、新たな座標を描き出すことを目指します。

展示期間：10月10日(土)～12月20日(日)

展示場所：WHAT MUSEUM



ARTS COUNCIL TOKYO



「電気羊の夢のあとで」ー 未完の展示記録

本美術展の初期計画を共に構想してきた、故 山峰潤也氏の未完の企画をテレコムセンターにてドキュメント展示。国内外で独自に築いてきた実践のアーカイブと共に彼の軌跡をたどります。

展示期間：10月10日(土)ー12月20日(日)

展示場所：テレコムセンタービル5階

協賛：株式会社NYAW



Art & Business gallery

アーティストへの支援やコラボなど企業によるアート関連の取り組みをパネル展示にて紹介します。企業とアートの多様な関わり方を発信することで、芸術文化を支える多様な担い手への理解を深めるとともに、アートとビジネスの持続的な好循環を生み出す契機となることを目指します。

展示期間：11月10日(火)～12月20日(日)

展示場所：テレコムセンタービル5階



品川区立品川歴史館特別展

「品川湾から東京港へー未完の港湾都市ー」

東京港が位置する海域は、かつて品川湾と呼ばれていました。縄文時代から人々が暮らし、やがて交通の要衝として発展していった品川。御台場の築造で変わる臨海部、明治時代以降の海の変化について、品川湾から東京港への変遷、発展の歴史を紹介します。

展示期間：10月10日(土)ー12月20日(日)

展示場所：品川区立品川歴史館



6 連携企画

TOKYO ATLAS会期中は、周辺地域や連携先との様々な試みを実施いたします。どうぞ注目ください。

ヤギの目 With 都立臨海青海特別支援学校

青海南ふ頭公園で作品を展開する「ヤギの目」は、隣接する東京都立臨海青海特別支援学校の子どもたちとの交流プログラムを実施します。会期前にはヤギの学校訪問やワークショップを行い、会期中には、子どもたちが制作した作品を会場内に展示予定。本プログラムは、アートを介した交流を通じて、子どもたちの創造性を育むとともに、来場者と地域をつなぐ機会を創出するものです。会期中にも複数回ワークショップを実施予定です。



次世代イベント警備の実証

セコム、NTTドコモビジネス、アジラが次世代イベント警備の実証を実施。セキュアなモバイル通信を活用した安全な映像伝送とAI画像解析により、人流分析や行動検知の有効性を検証。さらに、セキュリティロボット「cocobo」と人による警備を組み合わせ、広域屋外会場における警備品質向上と業務効率化の可能性を探ります。

実施会場：台場公園・お台場海浜公園、青海南ふ頭公園、テレコムセンタービル



自律走行型セキュリティロボット「cocobo」

TOKYO ATLAS VIRTUAL EXHIBITION

台場公園での展示をオンライン上で体験できる「TOKYO ATLAS VIRTUAL EXHIBITION」を公開予定です。会場を3Dデータとして記録し、来場者はパソコンやスマートフォンなどの端末から、実際に会場を巡るような感覚で展示を体験することができます。会場をバーチャル空間上に再現することで、時間や場所を問わず、より多くの方に展覧会を体験いただける環境を創出します。



お台場エリアと天王洲エリアを結ぶ特別クルーズ船「ARTE TOKYO CRUISE」を運航

期間：10月10日～12月20日

運航日：上記期間中、土日祝を中心に運航

航路：お台場海浜公園～天王洲ピア

水辺から東京の魅力を楽しめる多彩なコースを展開

時間：10時～16時台を中心に運航

便数：1日4便程度

運賃：1乗船区間(例：お台場海浜公園→天王洲ピア) 大人 1,500円
(高校生以下半額・未就学児は大人1人につき1人まで無料)

定員：40人程度

共催：品川区

チケット販売：<https://mizubetokyo.com/artetokyocruise/>



7 イベントリスト (2026年10月8日時点)

イベント一覧

※イベント内容は一部変更となる可能性があります

10月10日(土) 11:00 ~ 12:30

オープニング・シンポジウム

概要: 建畠哲AD、三木あき子AD、青柳正規実行委員長、帆足亜紀氏が東京で国際美術展を開催する意義とその効果などについて語る

会場: MONOフューチャーセンター(テレコムセンタービル14階)

登壇予定者: 建畠 哲、三木あき子、青柳正規、帆足亜紀(モデレーター)

対象・参加: 定員150名／要予約

備考: 英語字幕あり

10月10日(土) 14:30 ~ 16:00

青海エリア参加アーティストによるトーク

概要: 三木あき子ADが担当した青海エリアの参加アーティストが、作品と制作背景を紹介する開幕初日のトークプログラム

会場: TOKYO ミナトリエ

登壇予定者: 三木あき子、カウイター・ワッタナチャヤンクーン、イペェ・ヌル、ハルーン・ミルザ

対象・参加: 定員50名／予約不要

備考: 日本語・英語字幕を予定

10月12日(月・祝) 14:00 ~ 16:00

台場・天王洲エリア参加アーティストによるトーク

概要: 建畠哲ADが担当した台場エリア・天王洲エリアの参加アーティストが、作品と制作背景を紹介するトークプログラム

会場: 台場公園・お台場海浜公園 ※雨天会場: テレコムセンター 5階

登壇予定者: 建畠 哲、イケムラレイコ、石毛健太、水木壘、盛圭太

対象・参加: 定員50名／予約不要

10月12日(月・祝) 17:00 ~ 18:15(トーク)／ 18:30 ~ 21:00(交流会)

トークイベント&交流会

概要: 渋谷のMuseum of Imaginary Narrative Artsにて開催される、アーティストの竹岡雄二、建築家・藤原徹平、本展ADの三木あき子によるトーク。トーク後には、交流会も実施

会場: Museum of Imaginary Narrative Arts (MINA)

登壇予定者: 竹岡雄二、藤原徹平、三木あき子

対象・参加: 予約優先

料金:

トークイベント | 17:00-18:15 予約優先、無料(1ドリンク制)

交流会 | 18:30~21:00 予約不要・参加費1100円(税込)

協賛: 東急株式会社

公式サイトイベントページ
<https://tokyoatlas.jp/events>



ArtSticker予約ページ
<https://artsticker.app/events/157214>



7 イベントリスト (2026年10月8日時点)

イベント一覧

※イベント内容は一部変更となる可能性があります

10月17日(土) 11:00～12:00 / 14:00～15:00

「プチバトーのはぎれとロスフラワー®でつくるリメイク・モビール」

概要: プチバトーのサンプル品や規格外品の端切れと、まだ美しいのに捨てられてしまうお花「ロスフラワー®」を使って、オリジナルのモビールをつくる(TOKYO カルチャーデビュー・ワークショップ)

会場: テレコムセンター 5階

対象・参加: 5歳～小学6年生、各回20名／要予約(申込期限10月16日)

主催: 東京都、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)

ワークショップ講師: 株式会社プチバトージャパン

10月25日(日) 11:00～12:15 / 13:00～14:15 / 14:45～16:00

牛乳パックのアップサイクル版画体験(キッチンリトグラフ アート x 環境教育)

概要: 一度使ったものを別の用途で生まれ変わらせる「アップサイクル」身近な牛乳パックを版材にして、版画制作を体験する多摩美術大学連携プログラム

(TOKYO カルチャーデビュー・ワークショップ ネクスト・クリエイション・プログラム)

会場: テレコムセンター 5階

対象・参加: 小学3～6年生と保護者、各回10組／要予約(申込期限10月21日)

主催: 東京都、アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)、多摩美術大学

11月8日(日)、11月23日(月・祝)、12月5日(土)、12月12日(土)

国際美術展TOKYO ATLAS 鑑賞プログラムツアー

概要: 展示エリアを巡る一般向け鑑賞ツアー

会場: 対象展示エリア

対象・参加: 各回定員30名／要予約※10月より順次予約開始

料金: 無料／一部有料のプログラムがあります

共催: 一般財団法人カルチャー・ヴィジョン・ジャパン、カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社

企画: カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社

11月23日(月・祝) 13:00～16:00

TOKYO ATLAS おしごとマップ ワークショップ

概要: 仕事や役割が見える形に置き換え、社会やまちとのつながりを考える体験プログラム。ATLASに関わる職業を可視化したマップ展示と、こども記者による取材体験

会場: テレコムセンター、青海南ふ頭公園

対象・参加: 中高生、定員40名／要予約※10月中旬より予約開始

共催: 一般財団法人カルチャー・ヴィジョン・ジャパン、カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社

企画: 株式会社TAM

公式サイトイベントページ
<https://tokyoatlas.jp/events>



ArtSticker予約ページ
<https://artsticker.app/events/157214>



7 イベントリスト (2026年10月8日時点)

イベント一覧

※イベント内容は一部変更となる可能性があります

12月5日(土) 14:00 ~ 16:00

品川区立品川歴史館 トーク

概要: 地域の歴史・文化とTOKYO ATLASの展示をつなぎ、地域から企画を読み解くトーク

会場: 品川区立品川歴史館

登壇予定者: 富川武史(品川区立品川歴史館学芸員)、木村こころ・中川千恵子(座標キュレーター)

対象・参加: 定員100名／要予約

連携: 品川区立品川歴史館

12月6日(日) 10:00 ~ 12:00

盛圭太ワークショップ

概要(予定): 『天王洲をつなぐ100本の糸(仮)』をテーマに、参加者が地域と人のつながりを体験する。

街歩きと創作WSを組み合わせた内容

会場: 天王洲エリア

対象・参加: 定員30名／要予約※11月2日より受付開始

共催: 一般財団法人カルチャー・ヴィジョン・ジャパン、カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社

企画: 藤原羽田合同会社

公式サイトイベントページ
<https://tokyoatlas.jp/events>



ArtSticker予約ページ
<https://artsticker.app/events/157214>



8 開催概要

名称

日本語：国際美術展 TOKYO ATLAS（読み方：コクサイビジュツテントウキョウ アトラス）

英語：TOKYO ATLAS International Art Exhibition

会期

2026年10月10日（土）－12月20日（日）〔72日間〕※月曜休（但し、10月12日（月祝）、11月23日（月祝）は開場、翌火曜休）

※16時30分最終入場 ※地下駐車場は時間予約制

会場 ※一部を除き入場無料（予定）

〔台場エリア〕 台場公園・お台場海浜公園

〔青海エリア〕 テレコムセンタービル、青海南ふ頭公園、地下駐車場（青海南ふ頭公園内）、東京国際クルーズターミナル、東京臨海部広報展示室TOKYOミナトリエ

〔天王洲エリア〕 アイルしながわ、WHAT MUSEUM

主催

東京都、東京国際文化芸術祭実行委員会、公益財団法人東京都歴史文化財団

公式ホームページ

tokyoatlas.jp Instagram：@tokyoatlas_official



報道関係のお問合せ先

国際美術展「TOKYO ATLAS」広報事務局（株式会社サニーサイドアップ内）

TEL：03-6894-3200 Email：tokyo_atlas_pr@ssu.co.jp

担当：田中（080-4191-6365）、蓮見（080-4652-1423）、堀江、俊成

オフィシャル素材ダウンロード先

<https://x.gd/9UQPH>



これまでのプレスリリース

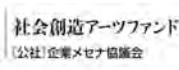
これまでに発表したプレスリリースについてはQRコードからご確認ください。

<https://tokyoatlas.jp/pressrelease>



9 パートナー（2026年10月8日時点）

助成



補助



協賛



TOKYO TELEPORT CENTER, INC.



信頼される安心を、社会へ。

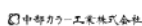
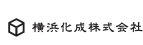
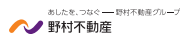


湖山医療福祉グループ

アクアウェッジ株式会社



株式会社 東京臨海ホールディングス



後援

港区、江東区

座 標

1



Co or di na



2

te



3

s

10.10 — 12.20

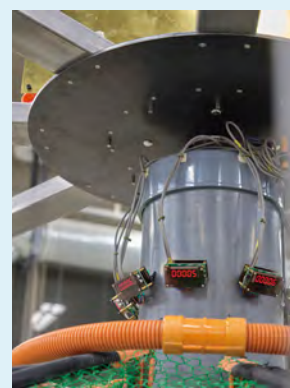
TOKYO ATLAS 関連企画
東京都による
支援作家たちの現在地



4

WHAT MUSEUM

5



目次

1. TOKYO ATLAS関連企画「座標」開催概要	1
2. 全アーティスト発表	2
3. 会期中プログラム	12
4. キービジュアル発表	13

キービジュアル画像クレジット

- 1 西村涼《私の生命を旅する 2》2023
Photo by KONO Yurika, Courtesy of Aomori Contemporary Art Centre, Aomori Public University
- 2 野村在《Today (21st of December, 2023)》2025
©Zai Nomura, in courtesy of PARCEL
- 3 海野林太郎《飛行日記 20231205-20240524》2024
Photo by TAMAKI Kai
- 4 陳郁文《If I mention a tree, what color do you think it should be?》2022
Photo by WANG Chung Ping, Courtesy of Sera Yu Wen CHEN
- 5 何梓羽《情報は常に不足している、だからマニ車を回そう》2024
Photo by ZHAO Zizhen

1. TOKYO ATLAS関連企画「座標」開催概要

本展は、東京都、東京国際文化芸術祭実行委員会及び公益財団法人東京都歴史文化財団が主催する国際美術展「TOKYO ATLAS」の関連企画として、同展と同じ期間中、天王洲のWHAT MUSEUMにて開催します。

1F展示会場は、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が実施する「アートマネジメント人材等海外派遣プログラム」を経験したキュレーターを中心に企画。2F展示会場は、国内外の幅広いジャンルのアーティストやクリエイターの活動や実験的な試みを継続的に支援してきたトーキョーアーツアンドスペース (TOKAS) が、TOKASやアーツカウンシル東京のプログラムに参加経験のあるアーティストによる展覧会を構成します。

「座標」は、東京都がこれまで支援してきたアーティストやキュレーターを中心に、それぞれの創造的活動の「現在地」に光を当てる展覧会です。タイトルの「座標」が示すように、個々の活動の軌跡と現在地が、多様な視点や実践とともにTOKYO ATLASという国際的な舞台で交差することで、新たな座標を描き出すことを目指します。

【名称】 座標 (英題: Coordinates)

【会期】 2026年10月10日(土)–12月20日(日) ※月曜休(祝日の場合、翌火曜休／10月12日、11月23日開場)

【開場時間】 10時–17時 (最終入場 16時30分) ※10月10日–11日は20時まで (最終入場19時30分)

【会場】 WHAT MUSEUM
140-0002 東京都品川区東品川2丁目6–10 寺田倉庫 G号

【入場料】 無料

【主催】 東京都、東京国際文化芸術祭実行委員会、公益財団法人東京都歴史文化財団

【公式ウェブページ】 <https://tokyoatlas.jp/zahyo> instagram: @tokyoatlas_zahyo_coordinates



【チーム体制】 1F展示 | 企画: 岩田智哉 (キュレーター)
木村こころ、エリカ・ドレスクラー (アソシエイト・キュレーター)
2F展示 | 企画: トーキョーアーツアンドスペース (TOKAS)
近藤由紀、大島彩子、中川千恵子
プロジェクト・マネジメント | 三木茜、池澤加那、見目はる香

【協賛】 寺田倉庫株式会社、品川区、中川特殊鋼株式会社、大成温調株式会社



【助成】 台湾文化部



【協力】 アーツカウンシル東京、トーキョーアーツアンドスペース (TOKAS)



2. 参加アーティスト

1F展示「積層する夢、浮遊する風景」

青柳菜摘+細井美裕
陳郁文（セラ・ユウェン・チェン）
何梓羽（カ・シウ）
西村涼
佐藤浩一+梅沢英樹
山縣瑠衣

2F展示「窓から覗く幽霊、手のひらの双子座の神様」

ちえんしげ
播磨みどり
小林椋
黒田恭章
野村在
大原崇嘉
谷崎桃子
海野林太郎
白井仁美

TOKASキュレーション パフォーマンス・プログラム

根本しゅん平

エントランス公開制作

尾形凌

1F展示「積層する夢、浮遊する風景」

将来アーティストと社会をつなぐ役割を担うアートマネジメント人材等を短期で芸術フェスティバルなどに派遣し、国際的な活動の第一歩となるよう、海外の芸術文化関係者とのネットワークをつくる機会を提供するアートマネジメント人材等海外派遣プログラムを経験したキュレーターを中心に企画。品川周辺の歴史や埋立地という会場周辺の地理的な特徴を土台に、アーティストの視点を通して新たなランドスケープを探ります。

岩田智哉（キュレーター）
木村ころ（アソシエイト・キュレーター）
エリカ・ドレスラー（アソシエイト・キュレーター）

アートマネジメント人材等海外派遣プログラム

芸術文化で躍動する都市・東京を目指し、2023年から開始。公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が、アーティストと社会をつなぐ若手アートマネジメント人材を短期で芸術フェスティバル等に派遣し、国際的な活動の第一歩となるよう海外の芸術文化関係者とのネットワークを作る機会を提供します。海外の先駆的な作品や創作現場に直に触れることで、国際的な視点に立った創作の機運醸成を図るとともに、将来的には本事業を通じて東京と各派遣先・海外セクターとのネットワーク構築・強化につなげます。2023年・2024年は3カ国、2025年は5カ国へ派遣しました。

1F展示キュレーターの岩田智哉、および本展プロジェクト・マネジメントを務める三木茜は2024年度プログラム（第60回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展派遣）に参加、1F展示アソシエイト・キュレーターの木村ころは2025年度プログラム（第36回サンパウロ・ビエンナーレ派遣）に参加しています。



参加アーティスト

青柳菜摘+細井美裕

陳郁文（セラ・ユウェン・チェン）

何梓羽（カ・シウ）

西村涼

佐藤浩一+梅沢英樹

山縣瑠衣

青柳菜摘 AOYAGI Natsumi

1990年東京都生まれ。2016年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。現在、東京都を拠点に活動を行う。映像メディアを用いた同時代芸術のアーティストとして、フィールドワークやリサーチをもとに、プロジェクトベースに主題を立てて作品を発表している。「JUMP アーティスト+キュレーター国際協働プログラム」に選出され、2026年にポルトガルで作品発表予定。コ本や honkbooks主宰。

近年の主な展覧会に、「ICCアニュアル2024 とても近い遠さ」（NTTインターコミュニケーション・センター [ICC]、東京、2024）、「亡船記」（十和田市現代美術館、青森、2022）などがある。詩集『そだつのをやめる』（thoasa、2022）が第28回中原中也賞受賞（2023）。

「Sound Atlas #1『極地からの音』（シビック・クリエイティブ・ベース東京[CCBT]、2025）、「布施琳太郎 市外劇=ツアー型展覧会『パピリオン・ゼロ：空の水族園』（シビック・クリエイティブ・ベース東京[CCBT]、2025）参加。「TOKAS 本郷ガイドマップ 音声ガイド」（2025）の制作に関わり、「OPEN SITE 11:『本郷で／描線を／聞くー 観察するための音声ガイド創作ワークショップ』（トーキョーアーツアンドスペース本郷、2026）を実施予定。



作品 | 青柳菜摘+細井美裕《新地登記簿》2024

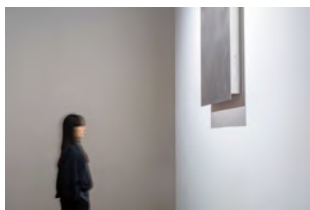
ポートレート | Photo by WADA Shintaro

細井美裕 HOSOI Miyu

1993年愛知県生まれ。2016年慶應義塾大学総合政策学部卒業。現在、東京都を拠点に活動を行う。サウンドインスタレーションや舞台作品を中心に、音が持つ情報伝達の可能性と不可能性を探る。近年は、場所・もの・ひとの記憶と記録について、国内外でリサーチベースのプロジェクトに取り組む。2026年10月国際交流基金の助成でCemeti Institute for Art and Society（インドネシア）に滞在予定。

近年の主な展覧会・公演に、「六本木クロッシング2025展：時間は過ぎ去る わたしたちは永遠」（森美術館、東京、2025-2026）、「Feel the Sound」（ハービカン・センター、ロンドン、2025）、「Sound Around 005『世界交換手』（ロームシアター京都、2025）などがある。

「Sound Atlas #1『極地からの音』（シビック・クリエイティブ・ベース東京[CCBT]、2025）参加。「TOKAS 本郷ガイドマップ 音声ガイド」（2025）の制作に関わり、「OPEN SITE 11:『本郷で／描線を／聞くー 観察するための音声ガイド創作ワークショップ』（トーキョーアーツアンドスペース本郷、2026）を実施予定。



作品 | 青柳菜摘+細井美裕《新地登記簿》2024

Photo by KIOKU Keizo, Courtesy of NTT InterCommunication Center [ICC]

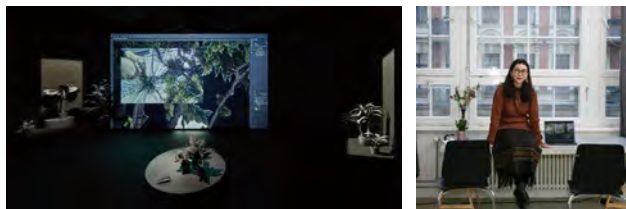
ポートレート | Photo by MITSUYA So

陳郁文 (セラ・ユウェン・チェン) Sera Yu Wen CHEN

1991年台湾生まれ。2019年シカゴ美術館附属美術大学修士課程(美術)修了。現在、台北(台湾)を拠点に活動を行う。映像、写真、インスタレーション、ニューメディアを横断しながら、風景や植物、アーカイブを手がかりに、記憶、文化的アイデンティティ、場所の関係性を探求し、移動や植民地主義、環境変化の歴史が現代の経験にどのように刻まれているのかを問いつけている。

近年の主な展覧会に、「Perceive Shadows in Mother Tongue」(Künstlerhaus Bethanien、ベルリン、2024)、「Tropical Imagination」(台北国際芸術村、2023)、「Everyday Fictionality: Beholding Shadows of Illusion」(台北市立美術館、2019)などがある。

「TOKAS Project Vol. 5『ひもとく』」(トーキョーアーツアンドスペース本郷、2022)、トーキョーアーツアンドスペース二国間交流事業プログラム招聘(台北)(2022)等参加。



作品 | 《If I mention a tree, what color do you think it should be?》2022
Photo by TAKAHASHI Kenji, Courtesy of Tokyo Arts and Space
ポートレート | Photo by Galya FEIERMAN, Courtesy of Künstlerhaus Bethanien

何梓羽 (カ・シウ) KASHIU

1990年四川省(中国)生まれ。2026年武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻彫刻コース修了。2017年北海道大学大学院国際広報メディア修了。現在、東京都を拠点に活動を行う。信仰、労働、アルゴリズムなどの反復的なシステムを通して、「リアリティ」がいかに構造的に生成されるのかを扱う。機械装置、運動機構、音を用いた可動構造を制作し、金属グリッドや工業製品、拾得物によって内部の仕組を可視化すると同時に、ブリコラージュ的な手法によって構造の中にブレや不安定さを生じさせる。

近年の主な展覧会に、「ART AWARD TOKYO MARUNOUCHI 2026」(行幸地下ギャラリー、東京、2026)、「P.O.N.D.2025 Swing Beyond / 揺らぎごと、超えていく。」(PARCO MUSEUM TOKYO、東京、2025)、「写実虚構 | Factual Fictions」(START GALLERY 4、神奈川、2025)などがある。

Tokyo Artist Accelerator Program (TAAP) (アーツカウンシル東京、2026) 参加。



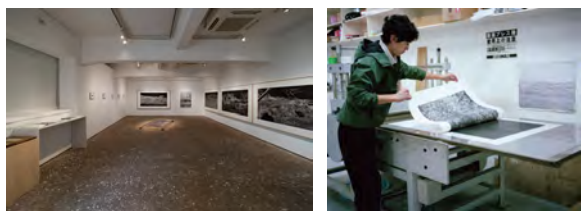
作品 | 《リアリストの占い Ver.2》2025 Photo by ZHAO Zizhen
ポートレート | Photo by WU Ke

西村涼 NISHIMURA Ryo

1993年京都府生まれ。2018年京都市立芸術大学修士課程版画専攻修了。現在、京都府を拠点に活動を行う。銅版画のドライポイント技法を主に用いながら自然界に流れる線を写し取り、自然の流動性や生命のいとなみを可視化する。版画を彫り、刷る行為を通じて、物事を観察して想像上のイメージを描き、自然界に本来なかった線という概念を、絵として実体化させて世界を探るという太古から続く人類のいとなみをなぞっている。

近年の主な展覧会に、「水の脈をとどめる」(高松市美術館市民ギャラリー / SICSサステナブルラウンジ、香川、2025)、「Putting life on paper / 光の種子を蒔く」(TAKU SOMETANI GALLERY、東京、2025)、「時に潜る」(国際芸術センター青森、2023)などがある。

「TOKAS-Emerging 2026:『私の生命を旅する／形象を追放する／風景を見つめる』」(トーキョーアーツアンドスペース本郷、2026) 参加。

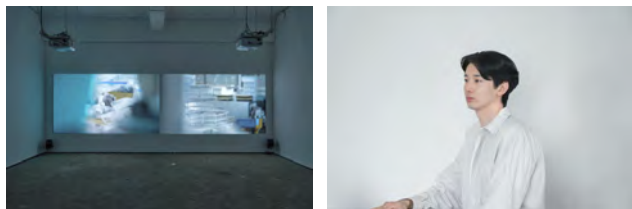


展示風景 | 「TOKAS-Emerging 2026:『私の生命を旅する／形象を追放する／風景を見つめる』」
(トーキョーアーツアンドスペース本郷、2026) Photo by KATO Ken, Courtesy of Tokyo Arts and Space
ポートレート | Photo by KONO Yurika, Courtesy of Aomori Contemporary Art Centre, Aomori Public University

佐藤浩一 SATO Koichi

1990年東京都生まれ。2019年東京藝術大学大学院美術研究科修了。現在、東京都を拠点に活動を行う。産業社会／消費社会と、その背後にある欲望が、自然環境や生物といった非人間的な存在をどのように扱ってきたのかに関心を持ち、リサーチやフィールドワークを行う。映像を主軸に、音や香りといった非物質的な素材も組み合わせながら作品を制作する。

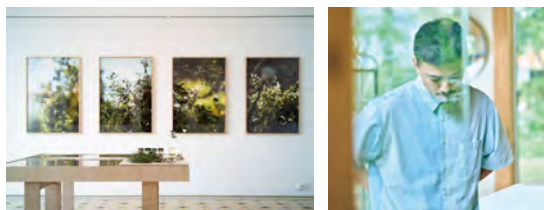
近年の主な展覧会に、「モノのエコロジー」(パリ日本文化会館、2025)、「すべてのものとダンスを踊ってー共感のエコロジー」(金沢21世紀美術館、2024)、「ATAMI ART GRANT 2024」(熱海市内各所、静岡、2024)などがある。「OPEN SITE 9: KANTO (佐藤浩一+ARCHIVE)『水の博物館』」(トーキョーアーツアンドスペース本郷、2025)、Tokyo Artist Accelerator Program (TAAP) (アーツカウンシル東京、2024) 参加。東京芸術文化創造発信助成 (アーツカウンシル東京、2021) 採択。



作品 | 《武蔵野の流水》2025
「OPEN SITE 9: KANTO (佐藤浩一+ARCHIVE)『水の博物館』」(トーキョーアーツアンドスペース本郷、2025)
Photo by TAKAHASHI Kenji, Courtesy of Tokyo Arts and Space

梅沢英樹 UMEZAWA Hideki

1986年群馬県生まれ。2019年東京藝術大学大学院美術研究科修了。現在、東京都およびパリ(フランス)を拠点に活動を行う。環境の中で知覚する前言語的な感覚や、自然現象の複雑性への関心をもとに、世界各地でフィールド・ワークやリサーチを行い、サウンドやイメージを採集し、様々なメディアを組み合わせたインスタレーションの制作・発表を行う。近年の主な展覧会に、「関係性のエコロジー」(マルセイユ現代美術センター、2026)、「モノのエコロジー」(パリ日本文化会館、2025)、「すべてのものとダンスを踊ってー共感のエコロジー」(金沢21世紀美術館、2024)などがある。東京芸術文化創造発信助成 (アーツカウンシル東京、2021) 採択。



作品 | 《Gazing at Traces in Each Place》2025
ポートレート | Photo by TAKENOUCHI Hiroyuki

山縣瑠衣 YAMAGATA Rui

1997年長野県生まれ。2022年東京藝術大学大学院美術研究科油画専攻修了。現在、東京都を拠点に活動を行う。視覚テクノロジーが生み出す可視と不可視の境界、見ることと知ることの間にある構造的な距離に関心を寄せる。Googleマップなどの俯瞰的画像、映像、絵画を横断しながら、地上にある身体の実験とその限界を問う作品を制作している。近年の主な展覧会に、「Pararell Circuit」(東京藝術大学陳列館、2025)、「風景記譜法」(クマ財団ギャラリー、東京、2024)、「Ground Zero」(京都芸術センター、2023)などがある。



作品 | 《画素と屋根》2023 Photo by MATSUMI Takuya

2F展示「窓から覗く幽霊、手のひらの双子座の神様」

国内外の幅広いジャンルのアーティストやクリエイターの活動や実験的な試みを継続的に支援してきたトーキョーアーツアンドスペース (TOKAS) が、TOKASや公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京のプログラムに参加経験のあるアーティストによる展覧会を構成。それぞれの身体感覚に基づき、自らの手から生み出される平面作品や立体、映像作品、パフォーマンスなどをとおして、さまざまな角度から現代美術の現在地を提示します。

近藤由紀 (トーキョーアーツアンドスペース、プログラムディレクター)

大島彩子 (トーキョーアーツアンドスペース、キュレーター)

中川千恵子 (トーキョーアーツアンドスペース、キュレーター)

トーキョーアーツアンドスペース (TOKAS)

公益財団法人東京都歴史文化財団が運営するTOKASは2001年に開館し、展覧会、公演、レジデンス・プログラムなど多岐にわたる活動を行ってきました。TOKAS本郷では、若手アーティストを個展形式で紹介する「TOKAS-Emerging」、国際的なキュレーターや文化機関と協働する「TOKAS Project」、ジャンルを問わず実験的な企画を実施する企画公募「OPEN SITE」といった展覧会事業を実施し、墨田区両国エリアに構えるTOKASレジデンスでは、各国のアーティストが滞在制作を行うレジデンス・プログラムを運営しています。

また、2018年より東京都と現代美術賞「Tokyo Contemporary Art Award (TCAA)」を創設し、海外での活動に意欲をもつ中堅アーティストを対象に複数年に渡る継続的な活動支援を行っています。



参加アーティスト

ちえんしげ

播磨みどり

小林棕

黒田恭章

野村在

大原崇嘉

谷崎桃子

海野林太郎

白井仁美

ちえんしげ CHEN Shige

1993年台湾生まれ。東京藝術大学大学院美術研究科美術専攻先端芸術表現研究領域博士後期課程在籍。現在、茨城県を拠点に活動を行う。絵画表現と記述表現を主軸に、両者をめぐる配置方法や境界、共存、乖離を遊びながら、その延長線上にある圧縮された(おトクな)視覚像や複言語社会、ディスコミュニケーション、特定の意味を持たない書写(アセミックライティング)などへのアプローチを思い巡らせる。最近では紙に書かれる造形表現や複言語マンガの記述方法に関心を寄せている。

近年の主な展覧会に、「構文；虚言；註と層と像」(SPACE NOBORU、東京、2025)、「群馬青年ビエンナーレ2025」(群馬県立近代美術館)などがある。

「TOKAS-Emerging 2023:『玄関をDumplingするには漂流なり』」(トーキョーアーツアンドスペース本郷) 参加。



展示風景 | 「バグスクール2024:野性の都市」(アートセンター BUG、2024)

Photo by YAMAMOTO Kohei

播磨みどり HARIMA Midori

1976年神奈川県生まれ。2000年女子美術大学芸術学部美術学科版画コース卒業。現在、神奈川県を拠点に活動を行う。印刷メディアにおける自身の経験を起点に制作を行い、白黒コピーによる紙の立体作品をはじめ、近年は、版画・写真・映像などのアナログ複製メディアを使って、作品と制作行為における作者を脱中心化する方法を探っている。近年の主な展覧会に、「修復の練習」(The Terminal KYOTO、京都、2025)、「場と印刷」(Maho Kubota Gallery、東京、2023)、「This is A Mirror」(The Shirley Fiterman Art Center、ニューヨーク、2023)などがある。トーキョーワンダーサイト二国間交流事業プログラム派遣(ソウル)(2015)参加。



作品 | 《This is A Mirror, After Camnitzer》2022

小林 椋 KOBAYASHI Muku

1992年東京都生まれ。2019年京都市立芸術大学大学院美術研究科修士課程彫刻専攻修了。現在、埼玉県を拠点に活動を行う。ものの「動き」を起点にしながら、不和のようなものを発生させる装置を組み立てたり、そうした仕組みをほかの事物と類推させたりすることで生まれる飛躍を観察しながら、彫刻やインスタレーション作品を制作する。時里充との演奏ユニット「正直」としても活動中。

近年の主な展覧会に、「且ん凡ん目ん、あと皿」(GASBON METABOLISM、山梨、2025)、「Everyday Enchantment 日常の再魔術化」(CHANEL NEXUS HALL、東京、2024)などがある。

「OPEN SITE 7:『亀はニフスのイユウのように前足を石にのぼすと』」(トーキョーアーツアンドスペース本郷、2022)、「TOKYO EXPERIMENTAL FESTIVAL Vol. 9:『ヨコとか下とか』」(トーキョーワンダーサイト本郷、2014)参加。



作品 | 《にこげの二枚貝の盤面》2024

黒田恭章 KURODA Yasuaki

1986年新潟県出身。2012年武蔵野美術大学大学院造形研究科デザイン専攻工芸工業デザインコース修了。現在、神奈川県を拠点に活動を行う。糸と言葉の関係に着想を得て、草木染めの絹糸を一本ずつ選び織物を制作する。数千から数万回の選択の集積として織物は形成され、そこには作者だけでなく、蚕や草木、土や水など多様な存在の歴史と関係性が織り込まれている。織る行為をととして、人と世界の相互的な生成を考える。

近年の主な展覧会に、「COUNTERPOINT」(drj art projects、ベルリン、2025)、「COLOUR FIELD ON FIELD」(Galerie Robertson Arès、モントリオール、カナダ、2024)、「『見る』をほどく」(ANAインターコンチネンタルホテル東京、2024)などがある。

Tokyo Artist Accelerator Program (TAAP) (アーツカウンシル東京、2025)、「TWS-Emerging 2017:『contextile』」(トーキョーワンダーサイト本郷)参加。



作品 | 《全ての他者たち》2026

野村在 NOMURA Zai

1979年兵庫県生まれ。2013年武蔵野美術大学博士課程修了。現在、ニューヨーク、東京都、兵庫県を拠点に活動を行う。存在と記憶の関係を軸に、写真・彫刻・装置、時にパフォーマンスも用いながら、肉体を含む物質の消失や記憶の変容を探究する。日常の微細な痕跡を作品化し、物質や時間の揺らぎを可視化することで、存在のあり方や本質を暴露することを試みる。

近年の主な展覧会に、「第13回ソウル・メディアシティ・ビエンナーレ:交霊会:精霊のテクノロジー」(ソウル市立美術館、2025)、「君の存在は消えない、だから大丈夫」(資生堂ギャラリー、東京、2024)、「At Six and Seven」(Uterior Gallery、ニューヨーク、2022)などがある。

「OPEN SITE 8:『Can't Remember I Forgot You - 忘れたことすら、覚えていない』」(トーキョーアーツアンドスペース本郷、2024) 参加。

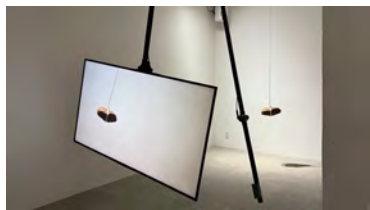


作品 |『Lost and Found』2024 Photo by TAKAHASHI Kenji, Courtesy of Tokyo Arts and Space
ポートレート | Photo by YAMAZAKI Tomoyo

大原崇嘉 OHARA Takayoshi

1986年神奈川県生まれ。2012年東京藝術大学大学院映像研究科メディア映像専攻修了。現在、東京都を拠点に活動を行う。色彩、空間、視覚認知の考察を基盤に、デジタルメディアを用いた作品を通じて、現代のメディア環境におけるイメージの拡張と相互作用を探究している。古澤龍、柳川智之とともにアーティスト・コレクティブ「ヨフ」としても活動中。近年の主な展覧会に、「やまなしメディア芸術アワード2023-24 入選作品展」(GASBON METABOLISM、山梨、2024)、「芸術未来研究場展」(東京藝術大学大学美術館、2023)、「ICCキッズ・プログラム2023『こんにちは、もうひとりのじぶん』」(NTTインターコミュニケーション・センター [ICC]、東京、2023)などがある。

「ACT (Artists Contemporary TOKAS) Vol. 6:『メニスル』」(トーキョーアーツアンドスペース本郷、2024 [ヨフ])、START Box (アーツカウンシル東京、2023) 参加、東京芸術文化創造発信助成 (アーツカウンシル東京、2020 [ヨフ]) 採択。



作品 |『Suspensions』2026

谷崎桃子 TANIZAKI Momoko

1991年東京都生まれ。2016年東京造形大学大学院美術研究領域修了。現在、神奈川県・湯河原を拠点に活動を行う。感情を赤裸々に表出するメディアとして絵画と向き合い、ネガティブなものを含む様々な体験の受容や回復の力を探究する。日常のささやかな感受性や世俗的な営みの中に潜むエネルギーを掴み、作品として可視化することを目指している。近年の主な展覧会に、「喧騒都市」(tata bookshop/gallery、東京、2026)、「鳥はどこから来たのだろうか?私は鳥に魅入られ、それに逆られない」(COPYCENTER GALLERY、東京、2025)、「ミッドナイト・ドリフター」(soda、京都、2025)などがある。

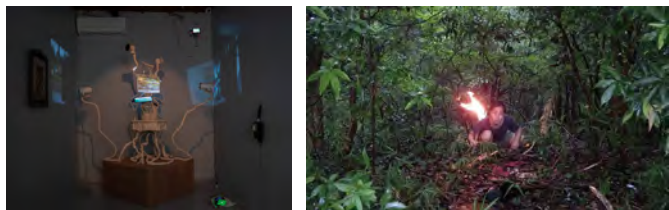
トーキョーアーツアンドスペース二国間交流事業プログラム派遣〔ケベック〕(2023)、「TOKAS-Emerging 2019:『lonely girl もう時間』」(トーキョーアーツアンドスペース本郷)等参加。



作品 |『ミッドナイトドリフター』2025

海野林太郎 UNNO Rintaro

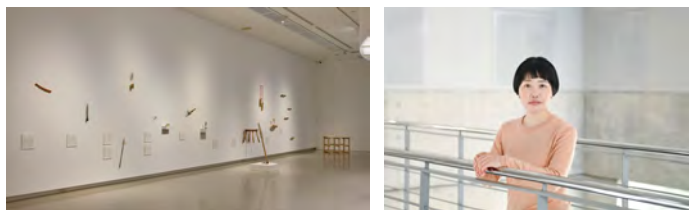
1992年東京都生まれ。2018年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。現在、東京都を拠点に活動を行う。映像、インスタレーション、絵画や立体などのメディアを往来して制作を行う現代美術家。天使やゲーム、無人航空機など多様なモチーフを扱い、メディアと個人・社会の関係を問いながら、人間の信念や特異な世界への眼差し方を探究している。マテリアルショップ「カタルシスの岸边」運営メンバー。近年は「アートエンジェル」とも名乗っている。近年の主な展覧会に、「スピリチュアル・フィクションズ」(デカメロン、東京、2025)、「『牢』vol. 2」(Forestlimit、東京、2025)、「奇跡」(EUKARYOTE、東京、2024) などがある。「OPEN SITE 2019-2020:『風景の反撃 / 執着的探訪』」(トーキョーアーツアンドスペース本郷) 参加。



作品 | 《デバイスとしての天使(往来 - All right!!)》2025

臼井仁美 USUI Hitomi

1980年東京都生まれ。2010年東京藝術大学大学院美術研究科修了。現在、東京都と神奈川県を拠点に活動を行う。世界を理解するための術としての制作活動をととして、人々の営みと生物の姿、その関係性を探究している。主に木を素材とし、想像上の「木器時代」を手がかりに、人間の自然への眼差しや、生活に溶け込んだ植物との関わり、民俗文化への関心をもとに制作する。近年の主な展覧会に、「Hiroshima MoCA FIVE 25/26」(広島市現代美術館、2025-2026)、「NEW New Artists / NEW Backbone Artists 2025」(Art Center NEW、神奈川、2025) などがある。Tokyo Artist Accelerator Program (TAAP) (アーツカウンシル東京、2024)、トーキョーアーツアンドスペース二国間交流事業プログラム派遣〔ヘルシンキ〕(2017) 等参加。



作品 | 《棚に枝、柱の氣息、ケズリカケの木々》(Hiroshima MoCA FIVE 25/26、広島市現代美術館、2025)
Photo by HANADA Kenichi

「TOKASキュレーション パフォーマンス・プログラム」

会場であるWHAT MUSEUMエントランス、ならびに天王洲セントラルタワーのエントランスにおいて根本しゅん平によるパフォーマンスを実施予定。

根本しゅん平 NEMOTO Shumpei

1983年神奈川県生まれ。日英でダンスを学び、近年は、独自の音響システムを組み上げるプロセスと、そこに身体の動きを介入させ音を生成するプロセスに関心があり、日々の実践を通して探求を続けている。

近年の主な発表に「Underway」(ロームシアター京都 ローム・スクエア、2025)、「Night Sea」(富士見市民文化会館 キラリふじみ、埼玉、2024)、「Night Sea, Island, Wave(s)」(UnterwegsTheater Heidelberg、ハイデルベルク、ドイツ、2023) などがある。

「OPEN SITE 2018-2019:『It captures me, It moves me and It's gone』」(トーキョーアーツアンドスペース本郷) 参加。



エントランス 公開制作アーティスト

若手アーティストに創作場所を提供することを目的に、東京都及び公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京が運営する創作活動スペース「START Box お台場」で2024年と2025年にスタジオ制作を行ったアーティストによる公開制作。

尾形凌 OGATA Ryo

2001年東京都生まれ。2026年東京藝術大学美術学部先端芸術表現科修士課程在籍。現代における妖怪や不可視の存在たちを作品の主題とし、絵画や立体、アニメーションなどを通じて表現している。加えて妖怪と人間の狭間やあの世とこの世の狭間に存在する世界を描く事でそれらを可視化することを試みている。

近年の主な展覧会に、「てやんでい!べらぼうめ展」(27gallery tokyo、東京、2025)、「涅槃・NIRVANA」(digger gallery、東京、2023) などがある。

START Box(アーツカウンシル東京、2024 / 2025)、「START Box EXHIBITION vol. 3」(YAU CENTER、東京、2025) 参加。



作品 | 《猫仙酒宴図》2025

3. 会期中プログラム

本展開催期間中には、1F及び2F展示参加アーティストらが登壇するトークプログラムのほか、鑑賞体験を深めるためのツアー型鑑賞、ワークショップなどを開催いたします。
どなたでもご参加可能ですが、一部のプログラムは事前申し込みが必要となります。

座標アーティストトーク

会場 | EZOHUB TOKYO (東京都品川区東品川2丁目2-28 タチバナビル 1F)

日程 | 10月11日(日) 陳郁文(セラ・ユウエン・チェン) × 山縣瑠衣

11月8日(日) 海野林太郎 × 大原崇嘉 × 野村在

11月22日(日) 谷崎桃子 × ちえんしげ × 播磨みどり

12月6日(日) 臼井仁美 × 黒田恭章 × 小林椋

他、10月24日(土)、10月25日(日)、12月19日(土)も実施予定

定員・対象 | 30名(先着順)

筆談会「これより先、無言」

ゲスト | orangcosong (アート・コレクティブ)

会場 | WHAT MUSEUM

日程 | 11月8日(土)、12月5日(土)

ブラインド・コミュニケーターとめぐる雑談型鑑賞

ゲスト | 石井健介(ブラインド・コミュニケーター)

会場 | WHAT MUSEUM

日程 | 11月22日(日)、12月19日(土)

ワークショップ「オリジナルの妖怪をつくってみよう」

尾形凌(座標展アーティスト)

会場 | WHAT MUSEUM

日程 | 11月1日(日)、11月23日(月祝)

パフォーマンス「Island」

根本しゅん平(座標展アーティスト)

日程・会場 | 11月29日(日) 天王洲セントラルタワー前(東京都品川区東品川2丁目2-24)

12月6日(日) WHAT MUSEUM エントランス前

4. キービジュアル

ビジュアルコンセプト

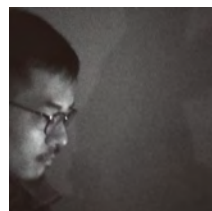
本展のビジュアルは、「座標」というテーマを空間的なレイアウトによって表現しています。タイトル、作品写真、会期情報などの要素が分散して配置されることで、それぞれが独立した「点」でありながら、ひとつの空間のなかで関係性を構築します。これは、東京都の支援を受けながら多様な領域で活動が続けるアーティストやキュレーター、マネジメント人材たちの現在地に重ね合わせたものです。背景に広がる淡いブルーの色面は、多様な活動や視点が交差するための座標平面として存在しています。情報を分散／組み替え可能な状態に保つことで、固定された意味や序列ではなく、鑑賞者自身が新たな地図を発見していく体験を促します。支援によって育まれてきた多様な実践をひとつの座標系のなかで捉え直し、その動的な関係性を可視化することを目指しました。



山田悠太郎 YAMADA Yutaro

1992年北海道生まれ。2018年東京藝術大学大学院美術研究科修了。2018年より田中義久に師事、centre Inc.所属を経て、2024年独立。文化施設や展覧会のためのビジュアルアイデンティティの開発、作品集や書籍の装丁などのグラフィックデザインを行う。自身の筆致や特定の場所におけるフロッターージュなどの絵画的要素を取り入れながら、メディアの物質性を手がかりとした実践を展開している。

START Box (アーツカウンシル東京、2023) 参加。



報道関係のお問合せ先

国際美術展「TOKYO ATLAS」PR事務局 (株式会社サニーサイドアップ内)

担当：蓮見 (080-4652-1423)、田中 (080-4191-6365)、堀江、俊成

E-mail: tokyo_atlas_pr@ssu.co.jp

オフィシャル素材ダウンロード先：

https://drive.google.com/drive/folders/1-v2FM45HLaBI_0UZ7lpCXYPbzY6GXC3E